クローズテストと文法運用能力

中　川　　武

0．はじめに

本論文では，日本人大学生を対象としたクローズテストおよび英語文法運用能力の関係を論じる。中川（2001a）では4年制大学に通う日本人英語学習者94名を対象として，クローズテストを用いたデータ収集および調査用紙（被験者のクローズテスト解答ストラテジーを探るもの）を用いた分析を行い，多くの被験者がテストを解く際に「語彙や文法の運用能力が必要になる」と認識していたことが明らかになった（詳細は上記論文を参照）。またクローズテストと読解・聴解テストとの間に0.6～0.7の相関が認められたことから，各テストに共通する要素として「予測文法能力」があり，この能力がテスト結果に関与することも示唆された。しかしクローズテストと文法運用能力テストとの関係は，データ収集や分析に必要な時間的制約から調査を見送らざるを得なかった。そこで本論文では，仮説検証を目的にデータを収集・分析し，クローズテストが学習者の文法運用能力を反映するかについて考察する。文法運用能力を9つの下位項目に分類し，どの文法項目がクローズテストと正の（あるいは負の）相関を示すかについても検討する。論文後半では，文法学習に困難を覚える学習者をふまえ，ややもすると「必要悪」「英語嫌いを生む要因」とみなされがちな英文法学習と，文法運用能力育成の重要性について述べる。

1．調査

(1) 実験教材

①クローズテスト

中川（2001a）で使用されたクローズテストを用いた[1]。項目数20・自由応答質問式である。採点方法は，3人の英語母国語話者の協力を得て予め明確な採点基準を確立した上で「適語法」を採用した（クローズテスト様式は資料1を，採点法・採点基準については中川（2001a）を参照）。

②文法運用能力テスト

a．文法を定義・測定すること

「文法」とは何かを定義することは難しい。語の配列・屈折，品詞の識別のように，一般的な意味で「文法」に含まれるものは数多いが，一方で音声や意味はどう扱うかなど，論じ始めると際限がない。従って本論文では佐藤・中川・岡田（2001b）の解釈に従い，英文法を『「英語の文を作り出す力（competence）」の基礎となる知識』として捉え，それを正しく活用できるかを文法運用能力

テスト[2]（資料２）によって問うことにする。ここでいう「competence」の解釈には，単に学習内容をテスト上に復元することに留まらず，学習者自身が文を作り出し，それをメッセージとして発信（および受信）する能力も含まれる。

ｂ．測定される文法項目

調査項目は９点である。各項目は５つの小問により構成され，３択式・計45問の文法運用能力テストとなる。問題用紙上にこれらの調査項目名は記載されていない。

(1) Present and past（時制・現在／過去）
(2) Present perfect and past（時制・現在完了／過去）
(3) Future（時制・未来）
(4) Modals（法助動詞）
(5) Passive（受け身）
(6) Articles and nouns（冠詞／名詞）
(7) Pronouns and determiners（代名詞／限定詞）
(8) Prepositions（前置詞）
(9) Adjectives and adverbs（形容詞／副詞）

(2) 被験者

４年制大学学生104名（英語専攻の学生なし）。

(3) 実施時期および分析方法

①クローズテスト　　(20問，2001年７月)
②文法運用能力テスト　　(45問，2001年７月)

テスト実施後，下準備として素点を算出した。データ処理・統計作業にはStatView J-4.5を用い，基礎統計と相関係数を検出した。各テストについて，ヒストグラムを用いて解答の分布傾向を概観した。

２．仮説

仮説は以下の２点である。

(A) クローズテストと文法運用能力テストは，0.4～0.7の範囲で正の相関を示す。
(B) クローズテストと「時制」に関する文法運用能力テストは，その他の文法項目と比較した場合，より高い相関を示す。

仮説（A）は，中川（2001a）の分析結果を考慮した上で，被験者が文法知識を活用してクローズテストに臨むことを反映したものである。相関係数の解釈は，清川（1990：42）によると±0.40

～±0.70で『かなりの相関がある』とされることから，少なくともこの範囲には含まれるものとした。

仮説（B）の背景には，「時制概念」の習得に困難を覚える数多くの学習者の存在がある。佐藤・中川・岡田（2001b）では，時制の定型が把握できない学習者例を挙げたことに加え，とりわけ未来時制の習得において格差が最大であったことを指摘した。この仮説は，クローズテストと文法運用能力テスト各文法項目との相関係数をもとに検証する。測定される文法項目のうち，時制に関連するものは(1) Present and past（現在／過去）(2) Present perfect and past（現在完了／過去）(3) Future（未来）の計15問である。

3．結果

(1) 基礎統計

表1　テスト基礎統計

テスト	平均点	標準偏差	最小値	最大値	範囲	分散	中央値	合計
クローズ	4.317	3.148	0	14	14	9.908	4	449
文法総計	20.846	4.362	11	33	22	19.025	21	2168
1	2.365	1.062	0	5	5	1.127	2	246
2	2.337	1.094	0	5	5	1.196	2	243
3	1.904	1.010	0	4	4	1.020	2	198
4	2.404	1.000	0	5	5	1.000	2	250
5	1.952	1.101	0	5	5	1.211	2	203
6	2.769	1.081	0	5	5	1.170	3	288
7	2.269	1.256	0	5	5	1.577	2	236
8	2.875	1.220	0	5	5	1.489	3	299
9	1.971	1.136	0	5	5	1.290	2	205

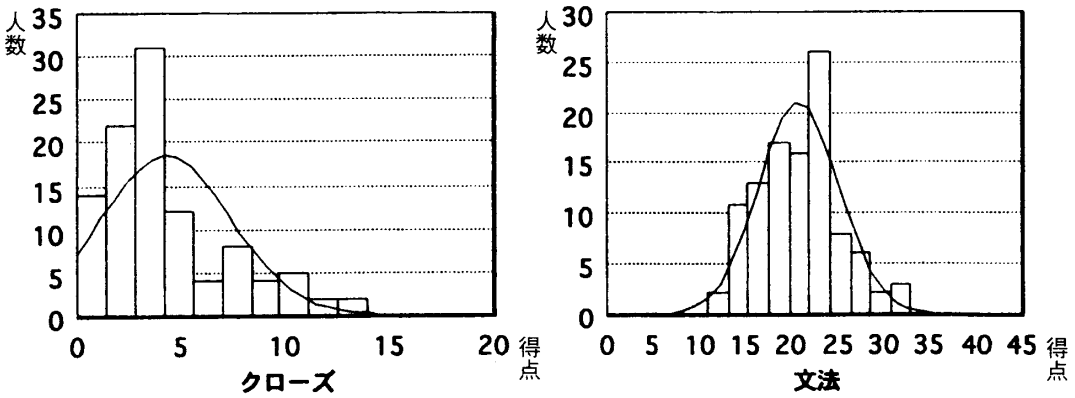

図1　ヒストグラム

クローズテスト平均点は4.317（得点率21.6%）とさほど伸びなかった（表１）。被験者集団が異なるため厳密な比較はできないが，昨年度平均点が同一テストを用いて7.511（同37.6%）であったことから，「大学生の基礎学力低下」といった昨今の指摘やカリキュラム改革の必要性を改めて思い起こさせる結果である。標準偏差・分散も，昨年度がそれぞれ4.345, 18.876（分散は標準偏差の自乗により算出される）を示したのに対し，本実験では3.148, 9.908と数値の減少が見られた。これは狭い範囲に被験者集団が凝集したことを意味する。また最大値も18から14に下がり，これらを総合しても本実験の被験者がクローズテストに苦戦したといえそうである。

ヒストグラムから得点分布の様子を見ると，この傾向はなお顕著である（図１）。昨年度と比較して上位得点者の占める割合が激減しており，あおりを受けて中央値が７から４に下がった。対照的に，合わせて実施した文法運用能力テストが被験者集団をほぼ正規分布に近い形で分散させている。９つの下位テストのデータを見ても，1.000（問題４，法助動詞）から1.256（問題７，代名詞／限定詞）の範囲と，近似した標準偏差を示している。

(2) 相関係数

表２　相関係数

テスト１	テスト２	相関係数（テスト1・２）	p値	95%下側	95%上側
クローズ	文法総計	0.652	<.0001	0.525	0.750
クローズ	1	0.235	0.0160	0.045	0.409
クローズ	2	0.197	0.0447	0.005	0.375
クローズ	3	0.223	0.0223	0.032	0.399
クローズ	4	0.264	0.0065	0.075	0.435
クローズ	5	0.383	<.0001	0.205	0.536
クローズ	6	0.113	0.2541	-0.081	0.299
クローズ	7	0.312	0.0012	0.127	0.476
クローズ	8	0.491	<.0001	0.329	0.624
クローズ	9	0.312	0.0012	0.127	0.476
クローズ	1+2+3	0.361	0.0001	0.181	0.518

クローズテスト・文法運用能力テストの相関係数は0.652である（表２）。昨年の実験では同一のクローズテストが読解テストと0.687，聴解テストと0.640の相関係数を示しており，クローズテストが総合的言語能力を反映するという従来の主張を改めて裏付ける結果である。

今回の実験では仮説（B）を支持する結果が出ていない。(1) Present and past（現在／過去）(2) Present perfect and past（現在完了／過去）(3) Future（未来）各テストとクローズテストとの相関係数は順に0.235, 0.197, 0.223と低い値に留まり，この実験において「時制」を扱うテストとの強い関連性は認められなかった。仮に３つの下位テストを合計して１セット（15問）としても，相関係数は0.361で依然として低い値である。その一方で，(8) Prepositions（前置詞）が0.491と下位テスト

の中でもかなりの相関値を示したことは，後述のように今後のクローズテスト改良の方向性を示唆するものである。

(3) クローズテスト

表3　クローズテスト正答率

問題番号	正答	正答率（正解者／全被験者／推移）	問題番号	正答	正答率（正解者／全被験者／推移）
1	with	13.5%(14／104／-7.8)	11	of	27.9%(29／104／-26.4)
2	and	7.7%(8／104／-1.9)	12	in	3.8%(4／104／-17.5)
3	and	26.9%(28／104／-27.4)	13	be	5.8%(6／104／-3.8)
4	be	58.7%(61／104／-13.6)	14	still	3.8%(4／104／-2.6)
5	and	5.8%(6／104／-19.7)	15	very	14.4%(15／104／-10.1)
6	he	38.5%(40／104／-23.2)	16	for	4.8%(5／104／-0.5)
7	end	8.7%(9／104／-23.2)	17	his	11.5%(12／104／-15.1)
8	to	71.2%(74／104／-12.8)	18	answered	37.5%(39／104／-24.2)
9	farmer	34.6%(36／104／-31.4)	19	have	46.2%(48／104／-22.9)
10	want	3.8%(4／104／-15.3)	20	wants	6.7%(7／104／-19.9)

表3はクローズテスト正答率である。20問中，最も高い正答率を示したのは問題8（71.2%）であり，昨年度と同様の傾向である。さらに問題4（58.7%），19（46.2%）と続くが，これも昨年度と同じ順位である。いずれも文脈に依存することなく正答を得やすい項目である。反面，大きく正答率が落ち込んだ項目が目立つ。参考のため，表内の「推移」で昨年度正答率との差を示したが，全項目で前年比マイナスになっていることに加えて，問題9（−31.4%），3（−27.4%），11（−26.4%），18（−24.2%），6および7（−23.2%），19（−22.9%），20（−19.9%），5（−19.7%），12（−17.5%）と過半数の項目で正答率が約2割～3割まで落ち込んでいる。原因はいくつか考えられるが，比較的易しい項目はともかく，テキストの内容理解度が問われる項目になると（例えば問題9は，主従関係や話全体の流れが正しく理解されなければ正答できない），一気に正答率が下がる。このことは誤答傾向一覧からも明らかである（表4）。

誤答傾向分析は，クローズテスト20問に対して被験者が示した全ての解答を表計算ツール上に再現し，そこから正答を取り除く形で行った。選び出された誤答を，さらに誤答者の多い順に抽出した結果が表4である。ここでは2人以上の被験者が誤答となった項目のみを対象とし，中でも今年度新たに出現した誤答を分析の中心とする。

昨年度データとの正答率比較において−31.4%という最大の下落を示した問題9では，昨年度の誤答がほぼ he（または He）に集中していたのに対し，本実験ではそれに加えて artist という誤答が14.4%あった。空欄を除き，4割近くの被験者がどちらかの誤答を記入したことになる。問題文中に直接登場する人物は2名しかいないことから，内容を十分把握できないまま，当て推量的に解答したものと思われる。

表4　クローズテスト誤答傾向

問題番号	正答	誤答（人数／割合%）		
1	with	to（20／19.2）	of（19／18.3）	for（7／6.7）
2	and	to（18／17.3）	were*（12／11.5）	for（9／8.7）
3	and	if*（6／5.8）	at*（4／3.8）	so/the*（3／2.9）
4	be	artist（7／6.7）	I（7／6.7）	
5	and	to（14／13.5）	he（9／8.7）	for/house（3／2.9）
6	he	in（4／3.8）	I（3／2.9）	artist/farmer...（2／1.9）
7	end	one****（11／10.6）	last/time（8／7.7）	all/day***（5／4.8）
8	to	a（3／2.9）	money/pictures（2／1.9）	
9	farmer	he*（19／18.3）	artist（15／14.4）	to（4／3.8）
10	want	have（31／29.8）	any（12／11.5）	no（11／10.6）
11	of	paint***（7／6.7）	to（6／5.8）	for/take（4／3.8）
12	In	For*（23／22.1）	On*（4／3.8）	Next/Take（3／2.9）
13	be	of（19／18.3）	have**/the（8／7.7）	pictures***（6／5.8）
14	still	not（19／18.3）	to（9／8.7）	it/soon（5／4.8）
15	very	not（9／8.7）	to（6／5.8）	a/for（4／3.8）
16	for	to（25／24.0）	was**（21／20.2）	and（4／3.8）
17	his	the（10／9.6）	to（9／8.7）	for/of（5／4.8）
18	answered	smiled**（8／7.7）	thanked（5／4.8）	them（3／2.9）
19	have	live**（17／16.3）	am**（9／8.7）	had/went（2／1.9）
20	wants	want（24／23.1）	have**（17／16.3）	went（10／9.6）

*　語頭が大文字、小文字いずれかの解答を合算したもの
**　have，has，had などの各活用形による解答を合算したもの
***　単数形、複数形いずれかの解答を合算したもの
...　それ以外の解答が複数個あるもの

問題3では if という誤答が新たに登場した（5.8%）。一般的なクローズテストの解答傾向として，テキスト文中に含まれる単語を空所補充のために借用する現象が挙げられる。（必ずしもこれは望ましい傾向ではない。とりわけ低得点層では，問題文中にある同一単語を何度も繰り返し用いる被験者が増えるからである。同じ単語ばかりで埋められた解答は，主述や内容を捉えようとする意識が希薄であることを示している。）この if はテキスト内に見られない単語であり，なぜ本実験の被験者に限り if が数多く出現したかについては注意する必要がある。本実験で，定率法[3]に基づきクローズテストを実施した意図は，あくまで学習者の習熟度（proficiency）を測定する点（＝集団基準準拠）にあり，達成度（achievement）を評価すること（＝目標規準準拠）ではない[4]。被験者が両者を混同すると，テスト結果にも負の影響が出てくる。

問題2では for が現れている（8.7%）。この部分を抜き出すと

Every day he went out (with) his paints and his brushes（問題2）painted from morning to evening.

となっており，本来は２つの節が接続詞 and で結ばれる形である。for は文法的な正確さからいえば完全な誤答であるが，「外出の理由が朝から晩まで写生をするためであった」と解釈すれば，for という前置詞の持つ意味合いはむしろ正解に近い。

問題４と６は互いに関連している。

（問題４）went back to the farm (and) had a good dinner before（問題６）went to bed.

正解は共に代名詞 he であり，これは既出の artist を受けている。これらにＩという１人称を入れた誤答がある（問題４＝6.7%，問題６＝2.9%）。会話文を除き，問題文全体は一貫して間接話法で書かれているので，いきなり地文がＩで綴られることはない。日頃から英文への接触が決定的に不足しており，話法上のルールや制約が習得されていないことがうかがえる箇所である。

問題７，10，13，19，20では，被験者が一様に空欄周辺の単語に惑わされたことがわかる。

At the（問題７）of his holiday...

“No, I do not（問題10）money, but...

... it will all（問題13）finished,

“... I（問題19）a son in London. He（問題20）to become an artist.

このように，空欄の前後など極めて狭い範囲でしかテキストを処理できていない。順に one of～（10.6%），not～any（11.5%），all of～（18.3%），live in～（16.3%），have to～（16.3%）といった慣用表現を強引に当てはめようとしたものと思われ，ここではより大きな意味のまとまりを意識して全体の構成を捉える「Top-down approach」が見られない。問題20では went という誤答も多く（9.6%），これは go to～という連鎖からよりも，むしろ動詞 want の過去形が正しく定着していないものと思われる。

４．まとめ

(1) 仮説検証

本節では，仮説の検証および「文法学習」について述べる。以下，本研究の仮説検証結果を示す。

仮説（A）は，両テスト間の相関係数が0.652となったことから，支持された。クローズテスト得点と文法運用能力テスト得点には「かなりの相関がある」といえそうである。

仮説（B）は，今回の実験ではクローズテスト得点と「時制」に関する文法運用能力テストとの間に目立った相関が見られなかった。しかし一方で，クローズテストと Prepositions（前置詞）が0.491という相関を示したことは，いわゆる定率法に加えて可変率法が日本人学習者にとって有効であることをうかがわせる。佐藤（1988：98）によれば，定率法は学習者の総合能力を反映するものであり，能力別クラス編成用のプレースメントテストや会話能力の間接測定に向いているという。換言すれば，これは「集団基準準拠テスト」としての機能であるといえよう。一方で，可変率法は「テスト作成者である教師が，学習者の弱点を補強するために，そのつど学習上のポイントを絞って出題することができる（同：99)」ために，特にテスト問題を診断的に利用する際に有効であるとしており，これは「目標規準準拠テスト」を想定したものと読み替えられよう。さらにその一例と

して佐藤は機能語を消去するクローズテストを挙げており，「特に前置詞は，数が多い上に使用頻度の高いものほど語義が広いので，学力レベルに合わせて数と用法を絞って出題するような配慮が必要であろう（同：101，下線は原文のまま）」と述べている。前置詞の場合と同様，機能語に含まれる接続詞や冠詞の運用能力測定においてもクローズテストが果たす役割に期待が持てることから，「可変率法に基づく機能語消去クローズテストの作成，実施およびデータ分析」を以降の研究課題として慎重に検討していきたい。

(2) 文法学習に対するさまざまな見解

日本人学習者は「文法」に対して強い苦手意識を持っているようである。佐藤・中村（2000）は，大学生に英語学習調査を行った結果，多くの学習者が「『これまで受けてきた中学，高校の英語学習は文法中心だ』という意識を持って（p. 55）」いながらその一方で「『私は文法が苦手です』『文法の勉強は嫌いです』という意識がある（同）」と指摘している。個人的見解ではあるが，文法知識と英語運用能力は表裏一体である。*I very like it!（筆者知人が頻繁に用いた英文。アステリスクは非文法的であることを示す）とするかI like it very much! を導くことができるかは文法知識に因るものであり，文法知識なくしては英語の質的向上が成立しないことになる。文法知識の蓄積といっても画一的な詰め込みを強制するのではなく，学習者の習熟度に沿う形で学習内容を精選・吟味し，豊富な練習により定着を図ることがその中心となれば，一層の学習効果が期待できよう。

「日本人の英語力（特に「会話能力」を指すことが多いと思われる）が他国のそれより低いのは，文法上の誤りを過度に恐れる傾向があるからだ」という通説がある。確かに学習初期の段階では，文法や発音よりも「積極的に聞く／話す姿勢」がより重要視されるべきである。恐らく早期英語教育が提唱される理由として，「積極性・自己表現能力の啓発」という見解も含まれるであろう。複数形を用いる状況で誤って単数形を用いてもコミュニケーション自体に影響はなく（ただし数そのものが問題になる場合は別である），一般的な会話において，冠詞の脱落や時制の誤用といった文法上のエラーは，些末な問題である。しかし習熟度が一定の水準に達すると，文法知識を軽視できない状況に迫られる。発話スピードを維持し，相応の単語や熟語，慣用句を活用しながら英語を使うと，一方で文法知識の欠損が目立ってくる。文法が不正確な話し手は，聞き手に過度の負担を強いる。話し手は気分よく話せても，聞く側にすれば内容理解のために膨大なエネルギーが必要となるからである。発話スピードが早ければ，その労力は一層大きくなる。聞き手が話し手に対してフラストレーションを抱き，相手を理解する心構えが失われてしまえば，それは言語学習の域にとどまらず，コミュニケーション自体が成立しないことになる。心的距離を近づける筈のことばが，逆に共感や理解の意欲を減退させるのは皮肉なことであるが，この種の難しさに直面した時こそが「習熟度が一定水準に達した段階」であり，高次の英語運用能力を身につける上でひとつの通過点といえよう。

英文法学習が英語習得を促進（もしくは阻害）するかについても意見が分かれる。2001年4月に東京で開かれた「日本人にとって英語とは何か？」というシンポジウム[5]では鳥飼玖美子氏（立教大学教授）が文法学習の意義を説いたのとは対照的に，ジョージ・フィールズ氏（国際ビジネスコンサルタント）は規則（＝文法）の学習ではなくまず実際の会話を聞き，自ら話すことから始める

べきと主張した。この種の「演繹か帰納か」という問題は，学習者が置かれる環境や条件（英語を母国語として学ぶのか，第二言語，あるいは外国語として学ぶのかなど）によって左右されるので，日本人学習者のように十分な言語材料のインプット・アウトプットが難しい場合，文法知識を蓄積しながら「話す・書く」といった生産的活動を同時進行で行うことが有効に思われる。ただし割合として，後者のような発信型タスクに一層の力点が置かれるべきであろう。

（なかがわ・たけし　産業情報学科）

注

(1) Hill (1965), *Elementary Stories for Reproduction 1, 1st series,* p. 12.（見出し1.000語レベルのテキストである）

(2) Murphy (1994), *English Grammar in Use, 2nd edition.*（同テキスト巻末付随のテストを材料に問題を作成した）

(3) クローズテスト作成方法に関して「定率法」「可変率法」の英訳には複数あり，Oller (1979) はそれぞれ fixed-ratio, variable-ratio を用いたが，佐藤 (1988) によれば random, rational（または non-random）とも呼ばれるようである。いずれも意味は同じで，前者では5語から10語までの範囲で一定の間隔を置いて語削除を行い，後者ではテスト作成者が設けた規準に基づき削除語を決定する。

(4) これら両者の違いに関しては，和田 (1999, 邦訳) が詳しい。

(5) このシンポジウムの論旨については，朝日新聞（2001年4月18日夕刊）に特集記事がある

資料

資料1　クローズテスト

次の英文を読んで，それぞれの空所に入れるのに適する語を記入してください。1つの空所には必ず1つの語が入ります。I'm や isn't などの短縮形は，以下の英文中では全て I am や is not のように2つの語に分けて表記してあります。

An artist went to a beautiful part of the country for a holiday, and stayed with a farmer. Every day he went out (1) his paints and his brushes (2) painted from morning to evening, (3) then when it got dark, (4) went back to the farm (5) had a good dinner before (6) went to bed.

At the (7) of his holiday he wanted (8) pay the farmer, but the (9) said, 'No, I do not (10) money, but give me one (11) your pictures. What is money? (12) a week it will all (13) finished, but your painting will (14) be here.'

The artist was (15) pleased and thanked the farmer (16) saying such kind things about (17) paintings.

The farmer smiled and (18), 'It is not that. I (19) a son in London. He (20) to become an artist. When he comes here next month, I will show him your picture, and then he will not want to be an artist any more, I think.'

解答　クローズテスト

1. with	2. and	3. and	4. he	5. and
6. he	7. end	8. to	9. farmer	10. want
11. of	12. in	13. be	14. still	15. very
16. of	17. his	18. answered	19. have	20. wants

資料2　文法運用能力テスト
(A*は正答を表す)

Present and past

(1) '..... this week?' 'No, she is on holiday.'
(A*)　Is Susan working
(B)　Does Susan work
(C)　Does work Susan

(2) I don't understand this sentence. What ..... ?
(A)　does mean this word
(B*)　does this word mean
(C)　means this word

(3) How ..... now?
(A)　you are feeling
(B)　did you feel
(C*)　are you feeling

(4) ..... anything yesterday.
(A)　I didn't
(B)　I don't do
(C*)　I didn't do

(5) Tom ..... his hand when he was cooking the dinner.
(A*)　burnt

(B) was burning
(C) has burnt

Present perfect and past

(6) Jim is away on holiday. He ..... to Spain.
(A) has
(B*) has gone
(C) has been

(7) We are good friends. We ..... each other for a long time.
(A) knew
(B*) have known
(C) have been knowing

(8) Sally has been working here ..... .
(A*) for six months
(B) since six months
(C) six months ago

(9) ..... a car when they were living in London?
(A) Do they have
(B*) Did they have
(C) Were they having

(10) I ..... television a lot but I don't any more.
(A) was watching
(B) was used to watch
(C*) used to watch

Future

(11) ..... tomorrow, so we can go out somewhere.
(A*) I'm not working
(B) I don't work
(C) I won't work

(12) That bag looks heavy. ..... you with it.
(A) I'm helping
(B) I help
(C*) I will help

(13) 'Mary is in hospital.' 'Yes, I know. ..... her tomorrow.'
(A) I visit
(B*) I'm going to visit
(C) I will visit

(14) We are late. The film ..... by the time we get to the cinema.
(A) will already start
(B) will be already started
(C*) will already have started

(15) Don't worry ..... late tonight.
(A*) if I am
(B) when I will be
(C) if I will be

Modals

(16) Why did you stay at a hotel when you went to New York? You ..... with Tom.
(A) can stay
(B) could stay
(C*) could have stayed

(17) I have lost my watch. I ..... it

somewhere.

(A) must drop

(B*) must have dropped

(C) must be dropping

(18) Why ..... go to hospital?

(A) had you to

(B*) did you have to

(C) must you

(19) I think all drivers ..... seat belts.

(A*) should wear

(B) had better wear

(C) can wear

(20) It is late. It is time ..... home.

(A) we go

(B) we must go

(C*) we went

Passive

(21) We ..... by a loud noise last night.

(A) woke up

(B) are woken up

(C*) were woken up

(22) There is somebody walking behind us. I think ..... .

(A) we are following

(B*) we are being followed

(C) we are being following

(23) 'Where ..... ?' 'In Tokyo.'

(A*) were you born

(B) are you born

(C) did you born

(24) The train ..... arrive at 11:30 but it was an hour late.

(A) supposed to

(B) is supposed to

(C*) was supposed to

(25) Where ..... ?

(A) did you cut your hair

(B) have you cut your hair

(C*) did you have your hair cut

Articles and nouns

(26) Keiko works at a big hospital. She is ..... .

(A) nurse

(B*) a nurse

(C) the nurse

(27) She works six days ..... week.

(A) in

(B) for

(C*) a

(28) Tom sat down on ..... chair nearest the door.

(A*) the

(B) an

(C) a

(29) It took us a long time to get here. It was ..... journey.

(A) three hour

(B) a three-hours

(C*)　a three-hour

(30) Where is ..... ?
(A)　the manager office
(B*)　the manager's office
(C)　the office of the manager

Pronouns and determiners

(31) I am going to a wedding on Saturday. ..... is getting married.
(A)　A friend of me
(B*)　A friend of mine
(C)　One my friends

(32) He is lazy. He never does ..... work.
(A)　some
(B*)　any
(C)　no

(33) We could not buy anything because ..... of the shops were open.
(A*)　none
(B)　all
(C)　nothing

(34) It was a great party. ..... enjoyed it.
(A)　All
(B*)　All of us
(C)　Everybody of us

(35) There is a bus ..... ten minutes.
(A)　each
(B*)　every
(C)　all

Prepositions

(36) I will be at home ..... Friday morning.
(A)　at
(B*)　on
(C)　in

(37) When we were in France, we spent a few days ..... Paris.
(A)　at
(B)　to
(C*)　in

(38) I saw Jack ..... a concert last Saturday.
(A*)　at
(B)　on
(C)　in

(39) I am not very good ..... swimming.
(A*)　at
(B)　for
(C)　in

(40) 'What time will you come?' 'I don't know. It depends ..... the traffic.'
(A)　for
(B)　from
(C*)　on

Adjectives and adverbs

(41) Maria's English is excellent. She speaks ..... .
(A)　perfectly English
(B*)　English perfectly

(C)　English perfect

(42) He ..... to find a job but he had no luck.
(A*)　tried hard
(B)　tried hardly
(C)　hardly tried

(43) The movie wasn't interesting. It was ..... I have ever seen.
(A)　most boring movie
(B)　the more boring movie
(C*)　the most boring movie

(44) ..... she can't drive, she has bought a car.
(A)　Even
(B)　Even if
(C*)　Even though

(45) ..... a long time for the bus.
(A)　We have to wait always
(B)　We have always to wait
(C*)　We always have to wait

参考文献

Hill, L.A. 1965 *Elementary Stories for Reproduction 1 (1st series),* Oxford University Press.
清川英男　1990『英語教育研究入門』大修館書店
Murphy, R. 1994 *English Grammar in Use, 2nd edition,* Cambridge University Press.
中川武　2001a「クローズテストと予測文法能力」『つくば国際大学研究紀要』vol. 7, 79－96.
――・佐藤敏子・岡田あずさ　2001b「効果的な英語学習指導に向けて―学習者の文法運用力調査―」『つくば国際大学研究紀要』vol. 7, 47－66.
Oller, J.W.Jr. 1979 *Language Tests at School,* Longman.
佐藤史郎　1988『クローズテストと英語教育』南雲堂
佐藤敏子・中村典生　2000「英語聴解力と文法運用力」『つくば国際大学研究紀要』vol. 6, 55－65.
和田稔　1999『言語テストの基礎知識―正しい問題作成・評価のために』(Brown, J.D. 1996 *Testing in Language Programs* の邦訳) 大修館書店

Cloze Test and Grammatical Competence of Japanese EFL Learners

Takeshi Nakagawa

Nakagawa (2001a) concludes that a cloze test shows a positive correlation with the learners' reading and listening comprehensive skill. Their response to the questionnaire also implies that they tend to be more conscious on their grammatical knowledge toward a cloze test. One experimental research clarifies how the cloze scores and their grammar skill are being overlapped.

The whole procedure are as follows;

(1) constructing a research plan (2 hypotheses included),

(2) collecting and computing all the raw score data into statistics, and

(3) eliciting some remarks from the figures.

The following conclusions are drawn by the results:

(1) The cloze test shows a fair correlation with the overall grammar test scores.

(2) Specifically, the cloze test shows a more positive correlation with the preposition test scores on this experiment.

Key Word: cloze test, correlation, grammatical competence